

フ ラ ン ス 語

安 藤 元 雄

大学における外国語教育の重要性については、もはや疑う人はいないだろう。それは単に外国文献の摂取のための基礎的技術（いわゆる読み）の習得だ

けを目的としたものではないし、また、外国人との知的交流術（いわゆる会話）の向上だけをねらうものでもない。もっと根本的な目標として、外国語による思考法に接することで、母国語という単一の言語による固定した思考法を相対化し、いわば思考の場を一次元の世界から二次元の世界へとひろげることがあげられる。

とすれば、大学における「第2」外国語教育の重要性も自然と明らかになるだろう。20歳に近い年令でABCから習い始めるという第2外国語のカリキュラムは、単に技術的な見地からすればきわめて不利な、下手な学習法である。だがそこには、単一言語思考を相対化するインパクトとしての「第1」外国語をさらに相対化し、思考の場を二次元の世界から三次元の立体的世界へと飛躍的にひろげる役割が秘められている。

こうした立体的思考空間を身につけることが、大学での学習に要請されているのだ。技術的向上は二の次だなどとは言わないが、下手でも不成績でもいい、とにかく学生諸君がこの第2のインパクトを全身で受けとめてくれさえすれば、第2外国語講座の担当者としてはもって瞑すべきだろう。

その意味では、政経学部でも2部の授業において第2外国語が全面的な必修科目ではなくなっていること、他学部や他大学でもときおりこのような傾向が見受けられることは、言葉こそ思考の下部構造であると考えてる者の目から見ても、いささか残念だと言わなければならない。

むしろ、フランス語の場合、そうした第2外国語としての位置づけだけでなく、フランスという国やフランス人という人種の言葉・文化・思考法の面白さ、豊かさ、奥深さなどといった、フランス語学習に固有の興味も多々あるのだが、窮屈なカリキュラムの中でなかなかそこまでを学生諸君に味わってもらえないのが惜しい。

(1980. 11. 30)